

各関係機関の長  
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成21年度病害虫発生予報第2号について  
平成21年度病害虫発生予報第2号を発表したので送付します。

## 平成21年度病害虫発生予報第2号

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

### 発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	葉いもち 斑点米カメムシ類	並	2 2
普通期水稲	葉いもち スクミリンゴガイ		2 2
野菜・工芸作物全般	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	やや多 並	2 3
施設野菜	土壌病害 コナジラミ類・アサミウマ類・アブラムシ類		3 3
果樹全般	果樹カメムシ類	やや多	3
かんきつ	そうか病 かいよう病 黒点病 ミカンハダニ ミカンハモグリガ アブラムシ類	並 並 並 並 - 並	3 4 4 4 4 4
茶	炭疽病 輪斑病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノホソガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシロカイガラムシ	並 - 並 並 並 やや少 並 並 やや少	4 5 5 5 5 5 6 6 6

は防除情報を発表

### 作物の生育状況（5月中旬）

早期水稲は、平年と比較して葉齢はやや早く、分けつ数はやや多いが草丈は低い状況であった。うんしゅうみかんは落弁期、茶は一番茶収穫終期であった。

### 6月の気象予報

天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温及び降水量はいずれも平年並の確率40%と予想されている。（3か月予報 鹿児島地方気象台5月25日発表）

## 発生予報の根拠および防除対策

### 早期水稲

#### 1 葉いもち（並）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) イネの生育は、葉齢は平年よりやや早く、茎葉数はやや多く、分けつ数はやや多いが、草丈は低い。
- ( 2 ) 5月中旬の巡回調査では発生未確認（調査地点）であった。
- ( 3 ) 6月の天候は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温及び降水量はいずれも平年並の確率40%と予想されている。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 曇雨天が続く場合は、あらかじめ粒剤を水中施用するか、または葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら直ちに液剤等で防除する。
- ( 2 ) 同一系統の薬剤の連用は、薬剤耐性菌が発生しやすいので避ける。

#### 2 斑点米カメムシ類

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 米の上位等級確保のためには、穂揃期とその7～10日後の2回防除が必要である。
- ( 2 ) 出穂の早い、または遅い水田には集中的に飛来するおそれがあるので注意する。
- ( 3 ) 早期米の等級格付け低下の主因は、カメムシ被害によるものであるので必ず防除を実施する。

### 普通期水稲

#### 1 葉いもち

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 育苗期の発生に注意し、本田への持ち込みを防止する。
- ( 2 ) 育苗箱施薬は、予防的効果が高く、本田での第一次伝染と生育初期の蔓延を防止するので必ず実施する。特に長期残効型箱施薬剤は持続効果が約80日と長く、省力的である。
- ( 3 ) 6月の天候は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温及び降水量はいずれも平年並の確率40%と予想されている。
- ( 4 ) 補植用の取り置き苗は、葉いもちが発生しやすく、本田への伝染源になりやすいので補植が終わったら処分する。
- ( 5 ) 育苗箱施薬を実施していない場合、曇雨天が続くときはあらかじめ粒剤を施用するか、葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら直ちに液剤等で防除する。
- ( 6 ) 同一系統の薬剤の連用は、薬剤耐性菌が発生しやすいので避ける。

#### 2 スクミリンゴガイ

[ 防除上の注意 ]

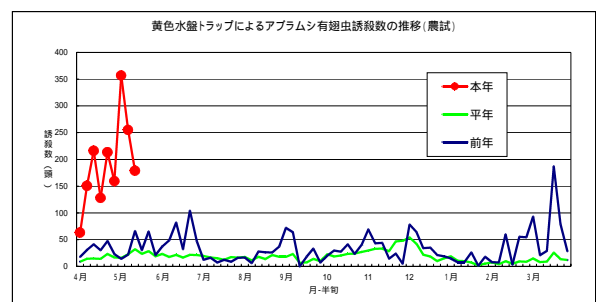
- ( 1 ) 水稲の被害は、田植え直後から3週間が著しく、その時期に深水状態ほど被害が激しいので、活着後は浅水で管理する。
- ( 2 ) 貝の生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施薬を行う。
- ( 3 ) 粒剤の水面施薬に際しては、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも7日間はかけ流しや落水はしない。

### 野菜・工芸作物全般

#### 1 アブラムシ類（やや多）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 黄色水盤トラップ（佐土原）による誘殺数は平年より多い傾向で推移している。（右図参照）



## 2 ハスモンヨトウ (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) フェロモントラップ ( 西都、都城、国富 ) による誘殺数は平年並で推移している。

### 施設野菜

平成21年度病害虫防除情報第1号 ( 平成21年5月28日発表 ) 参照

#### 1 土壌病害

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 土壌病害のみられたハウスでは、土壌消毒の効果を高めるため、栽培終了後被害残さを施設外に持ち出し焼却処分する。

また、ハウス内は耕起を行って、残さの分解を早めることが重要である。

#### 2 コナジラミ類・アザミウマ類・アブラムシ類

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 近年、コナジラミ類、アザミウマ類やアブラムシ類など微小害虫によって媒介されるウイルス病 ( TYLCV、TSWV、CMV、MYSV、CCYV ( 仮称 ) 等 ) が問題となる事例が増加傾向にある。

- ( 2 ) これらの媒介虫は、栽培終了後野外へ拡散し、地域での密度増加、さらに次期作への主な発生源となるおそれがあるので、栽培終了後は株を抜き取り、少なくとも10日間は施設を密閉するなど媒介虫の死滅を図る。

- ( 3 ) ほ場周辺の雑草は、各害虫の生息場所となり、次作への伝染源となるので除草を徹底する。また、ほ場外に持ち出した作物残さは完全に枯死させる。

### 果樹全般

#### 1 果樹カメムシ類 ( やや多 )

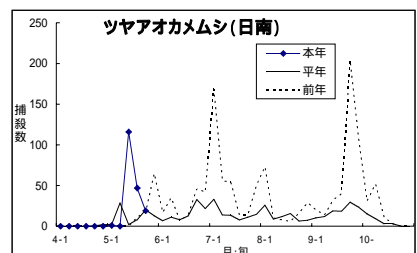
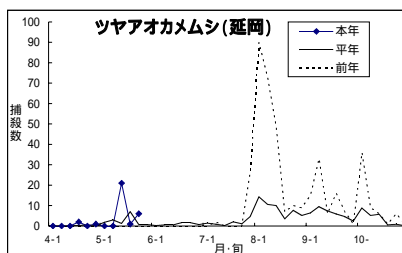
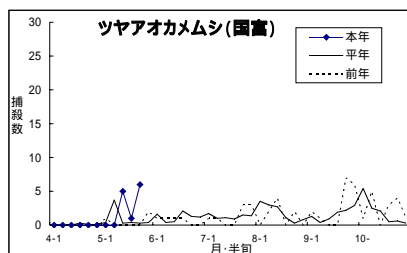
[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 県内の3地点に設置したフェロモントラップ調査では、ツヤアオカメムシ、チャパネアオカメムシともに平年並の飛来状況であるが、国富、日南、延岡に設置した予察灯における5月第3半旬のツヤアオカメムシの誘殺数が急増している。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動する。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努める。

- ( 2 ) 成熟・着色の早い果実を集中加害する傾向があるので、今後モモ、ナシ等は特に注意する。



### かんきつ

#### 1 そうか病 (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 5月中旬の発生面積率5.0% ( 平年8.6% )、発病葉率0.4% ( 平年0.6% ) はいずれも平年並である。

- ( 2 ) 6月の天候は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温及び降水量はいずれも平年

並の確率40%と予想されている。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 防除適期は幼果期である。

## 2 かいよう病 ( 並 )

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 5月中旬の巡回調査では、1地点において微発生の確認である。

( 平年値 発生面積率3.2%、発病葉率0.3% )

( 2 ) 6月の天候は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温及び降水量はいずれも平年並の確率40%と予想されている。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 梅雨期に予防散布する。

( 2 ) ミカンハモグリガの防除に努める。

## 3 黒点病 ( 並 )

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 5月中旬の巡回調査では、発生未確認である。

( 2 ) 6月の天候は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温及び降水量はいずれも平年並の確率40%と予想されている。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 防除適期は幼果期、梅雨期であるが、降水量が多いほど発生が多くなるので、前回防除してからの積算降水量300mmを農薬散布間隔の目安として予防散布する。

## 4 ミカンハダニ ( 並 )

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 5月中旬の発生面積率20.0% ( 平年17.9% ) は平年並、寄生葉率0.5% ( 平年1.5% ) は平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30% ( 1葉当たり虫数0.5~1頭 ) を目安に防除を行う。

## 5 ミカンハモグリガ

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) かいよう病の発生を助長するので、新梢伸長期間中は定期的に防除する。

( 2 ) 成虫の活動は夜間で、日中は葉裏に潜んでいるので、樹全体の防除が効果的である。

## 6 アブラムシ類 ( 並 )

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 5月中旬の発生面積率15.0% ( 平年39.6% ) は平年よりやや少、寄生新梢率0.7% ( 平年5.3% ) は平年並である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 成木園では異常発生の場合を除いて防除の必要性はほとんどない。

( 2 ) 中晩柑類ではウイルス病 ( C T V 等 ) を媒介するので留意する。

茶

## 1 炭疽病 ( 並 )

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 5月中旬の巡回調査では発生未確認である。

( 平年値 発生面積率22.9%、 $m^2$ 当たり発病葉1.0 )

( 2 ) 6月の天候は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温及び降水量はいずれも平年並の確率40%と予想されている。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 2番茶の萌芽期に防除する。

## 2 輪斑病

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 病原菌は、摘採時にできた葉や茎の傷口から侵入する。摘採後、早く薬剤散布するほど防除効果が高いので、できるだけ摘採当日に防除する。摘採後4日以降の防除では効果がない。

## 3 カンザワハダニ (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 5月中旬の発生面積率33.3% ( 平年51.4% ) は平年より少、寄生葉率6.8% ( 平年4.6% ) は平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ - テ - ション散布を実施する。

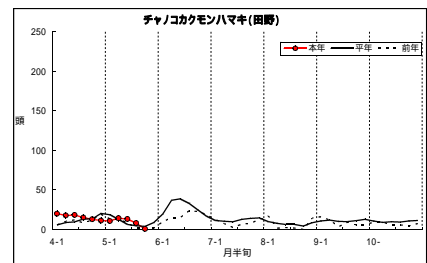
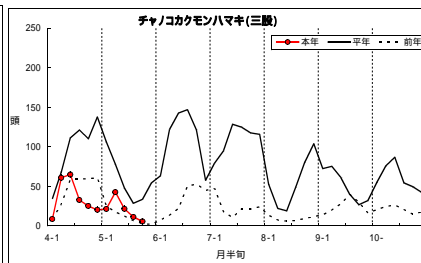
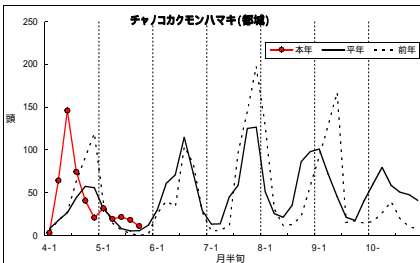
## 4 チャノコカクモンハマキ (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 5月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) フェロモントラップ調査による4月の発蛾最盛期は、平年より10日程度早い4月第3~4半旬であり、次回の発蛾最盛期は6月上旬と考えられる。  
( 2 ) 顆粒病ウイルスによる防除適期は、6月の発蛾最盛期の10日後である。



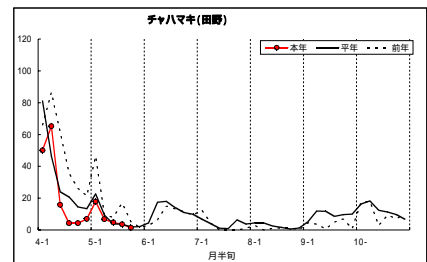
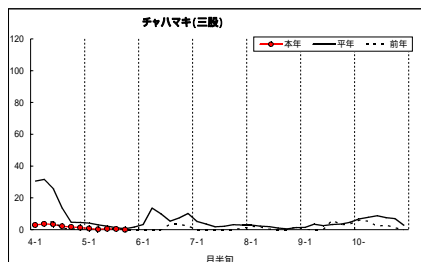
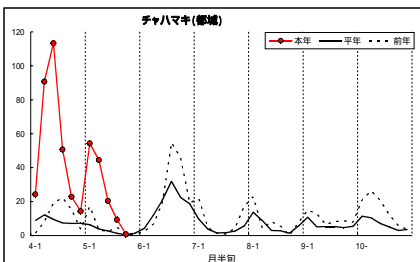
## 5 チャハマキ (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 5月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) フェロモントラップ調査による4月の発蛾最盛期は、4月第2~3半旬であり、次回の発蛾最盛期は6月第2~3半旬と考えられる。  
( 2 ) チャノコカクモンハマキの発蛾最盛期と10日以上差がない場合は、チャノコカクモンハマキと同時防除が可能である。



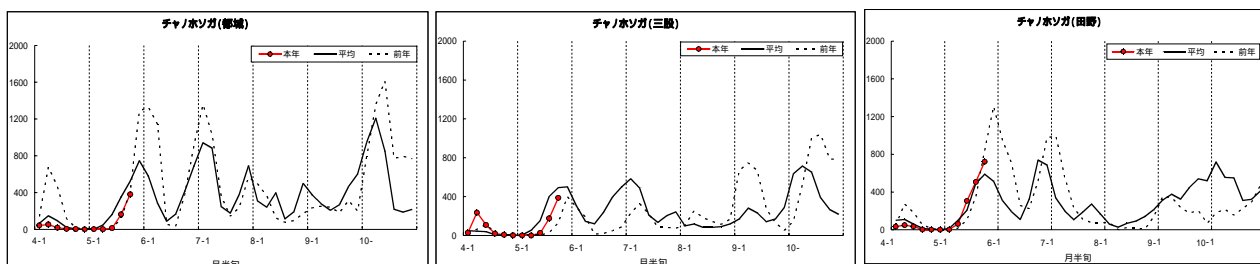
## 6 チャノホソガ (やや少)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 5月中旬の巡回調査では発生未確認である。  
( 平年値 発生面積率19.6%、 $m^2$ 当り巻葉数0.5枚 )  
( 2 ) フェロモントラップ調査での誘殺状況は、平年並で推移している。  
( 3 ) 農林振興局 ( 普及センター ) の情報で、一部発生しているほ場が確認されている。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 次回の発蛾最盛期は5月末～6月上旬と予想される。防除適期は発蛾最盛期の約10日後である。
- ( 2 ) 脱皮阻害剤は、卵期～皮下潜葉期に散布する。
- ( 3 ) 一番茶芽や一番茶残葉に本虫による巻葉がみられた茶園では、二番茶芽で多発するおそれがあるので注意する。



### 7 チャノミドリヒメヨコバイ (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 5月中旬の払い落とし調査による発生面積率8.3% ( 平年18.2% )、払い落とし虫数0.2頭 ( 平年0.5頭 ) はいずれも平年よりやや少、見取りによる寄生葉率0.2% ( 平年0.2% ) は平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 萌芽直後から1、2葉期を重点に防除する。

### 8 チャノキイロアザミウマ (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 5月中旬の払い落とし調査による発生面積率33.3% ( 平年62.3% ) は平年よりやや少、払い落とし虫数9.1頭 ( 平年7.3頭 ) は平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 例年、2番茶期から発生が増えてくるので注意する。

### 9 クワシロカイガラムシ (やや少)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 5月中旬の巡回調査では発生を認めていない。  
( 平年値 発生面積率29.4%、寄生株率9.0% )
- ( 2 ) 農林振興局 ( 普及センター ) の情報で、一部多発しているほ場が確認されている。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 第2世代幼虫の防除適期は、幼虫ふ化開始から1週間後、または幼虫ふ化最盛期であるが、ふ化状況をよく観察し防除する。
- ( 2 ) 薬剤散布量は、成園で10a当たり1,000リットルを目安に、枝幹に十分かかるようにいねいに行う。

## その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。  
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>  
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>  
農林水産消費安全技術センターホームページ  
(旧 農薬検査所) <http://www.acis.famic.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。  
特に水質汚濁性農薬ベンゾエピソ剤(商品名、リックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。
- 3 発生量(程度)の区分  
多 い (高 い) やや多いの外側10%の度数の入る幅  
やや多い (やや高い) 平年並の外側20%の度数の入る幅  
平年並 平年値を中心として40%の度数の入る幅  
やや少ない (やや低い) 平年並の外側20%の度数の入る幅  
少ない (低 い) やや少ないの外側10%の度数の入る幅  
(平年値は過去10年間の平均)

## 4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- (1) 予 報……向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- (2) 注 意 報……主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- (3) 警 報……主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- (4) 特 殊 報……県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- (5) 防除情報……注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指情報について随時発表する。

**お知らせ**(<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を登録しています。ぜひご利用ください。

### 【文書取扱】

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp